

《論 文》

透谷と『紅樓夢』

池間 里代子

Tokoku and *Dream of Red Chamber* (*Honglouloumeng*)

RIYOKO IKEMA

キーワード

鏡 (a mirror), 夢想的 (dreamlike), 悲恋 (tragic love ended in tragedy)

はじめに

北村透谷 (1868 : 明治元年12月29日 - 1894 : 明治27年5月16日) は小田原で生まれ、12歳で東京へ転出し、1883 : 明治16年東京専門学校 (現、早稲田大学) 政治科に入学、自由民権運動に身を投じた。しかし、同志から資金調達の為強盗を強要され、絶望して運動から離れる。1888 : 明治21年数寄屋橋教会で洗礼を受け、同年石阪ミナと結婚。

翌1889 : 明治22年日本平和会結成に参画。普連土女学校 (現、普連土学園)・明治女学校の教員をしながらキリスト教系雑誌の編集 (『聖書之友雑誌』) などで生計を立て、評論・詩・小説などを雑誌に発表した。1893 : 明治26年にキリスト教より離脱、自殺未遂をおこした。1894 : 明治27年芝公園に転居したが、5月16日縊死。¹⁾

透谷は短い生涯で3本の小説を書いており、最後の『宿魂鏡』(1893 : 明治26年1月13日『国民之友』第178号春期附録に「透谷庵主」の名で掲載された) のモチーフが『紅樓夢』第12回 (賈瑞が風月宝鑑により幻覚を見て死んだ話) であった。²⁾ 本稿はこの事実を中心に、透谷と

『紅樓夢』との関係を考察するものである。

『宿魂鏡』の粗筋 : 主人公である山名芳三は東京の大学に入り、戸澤男爵に見出され書生として屋敷に住み、将来は高官になることが約束されている。芳三の学資を出してくれた故郷白河在住の孫兵衛の娘・阿梅とは結婚の約束があった。しかし、芳三は山名家の令嬢弓子と恋仲になる。弓子の継母はある企みから芳三が邪魔になり、故郷に追い出す。別れ際、弓子は自分の血がついた古鏡を贈る。弓子は継母によって亀野へ嫁がせられそうになり、病を得る。芳三は故郷で鏡に映る弓子の幻像に取りつかれ、狂乱状態に陥る。戸澤男爵は弓子と芳三との仲を許すが、同時刻に二人はみまかった。

1893 : 明治26年1月3日『国民之友』第177号予告文 :

「嗚呼弓子の影、此中に現ず、彼の女の心は此の中に籠れり、詩人は曾て此の幻鏡を把つて、盲鏡と呼び、死鏡と名づく、されどこは人間最高の愛情也、最純最潔の愛是れ也、宿魂鏡、宿魂鏡、我れ之を懷いて名を捨てたり、利を棄てたり、果ては此の世も、此の命も。

一篇悲観的の文字、凄愴人を愁殺す、又得易からざるの大作也。」

1. 小説『宿魂鏡』のモチーフと『紅樓夢』第12回

1-1. 『紅樓夢』第12回

『紅樓夢』甲戌本（1754：乾隆19年成立，16回残存）第1回の縁起によれば，原名『石頭記』→空空道人こと情僧『情僧録』→吳玉峯『紅樓夢』→東魯の孔梅溪『風月宝鑑』→曹雪芹『金陵十二釵』のように題名が変わり，評伝では曹霑（雪芹）には『風月宝鑑』なる旧稿があり，弟の棠村がこれに序したというが，伝わらない。これは題名が示す通り『金瓶梅』的な傾向の著しいものだったと想像され，王熙鳳（お屋敷の口八丁若奥様）や秦可卿（美貌だが多情な若奥様，密通を恥じて自殺したらしい）らが現本以上の役柄を演じたものと考えられる。³⁾

この回は「王熙鳳毒設相思局 賈天祥正照風月鑑（王熙鳳むごくも相思の計を設くること 賈天祥とともに風月の鑑に照らすこと）」という副題がついており，夫ある王熙鳳に横恋慕した賈瑞（天祥）が，策に嵌って命を落とす場面である。王熙鳳が仕掛けた罠に二度までかかったにもかかわらず，まだ追慕する賈瑞がついに死病を得てしまう。そこに跛の道士が現われ「これは太虚幻境の空霊殿から出た物でしてな，警幻仙姑さまお手づくりの品ですじゃ。もっぱら邪思妄動の病をいやし，濟世保生の力をもってありますゆえ，これをこの世にたずさえきたり，ご聡明な俊傑の士，ご風雅な王孫公子のかたがたに限りこれに映させて進ぜまする次第。ゆめ正面より映さるるな。ひたすら裏面にうつされよ。それがなにより肝要。…」⁴⁾ といって鏡を手渡す。ところが裏面を映すと髑髏が見えるので驚き，表面にすると王熙鳳が手招きする。何回かそれを繰り返すと人事不省に陥り，絶命してしまう。

このシーンを島崎藤村が1892：明治25年6月18日，白表『女學雑誌』第321号に「紅樓夢の一節 風月宝鑑の辞 無名氏訳」として発表した。「イヤこゝに妙薬あれば，これをそなたに

進ぜましょう。これを毎日御覧になれば，そなたの命も保ちますといひつゝ，うらをもて共に人を照らすべき鏡をとり出せしが，うへには「風月宝鑑」の四字を鑿着たり。道士これを病人の手に渡し，そもこれはこれ太虚元境空霊殿上におはします警幻仙子の御作にて，第一に邪思妄動の病を治するより濟世治生の効能ある御物。拙者がこれをもちて人間の代に来るといふも故あること。決してその鏡の正面を御覧あるな。たゞたゞ背の方のみ照らして御坐れ。」とある。⁵⁾ かなり正確な訳となっており，田邊蓮舟が助け船を出したとされる。⁶⁾ なお，藤村は漢学を栗本錦雲に，『紅樓夢』を田邊蓮舟に学んでいた。⁷⁾

1-2. 鏡の暗喩

鏡は世界各地で様々な伝承があるが，最初は水鏡であった。とりわけ中国では「鏡」字が文献に出てくる戦国時代以前においては「鑑」字を用いていた。「鑑」にある「皿」はサラの上に目が覗きこんだ象形である，という説もある。⁸⁾ 漢代の『説文解字』には「鑑，大盆也。一曰，監諸。（鑑とは，大きな盆である。別説に，すべてを見通すという。）⁹⁾」と解釈されている。

原始では呪術的意味合いが多かったが，みずからを省みるという行為が哲学化され，歴史の中で現在を顧みて反省をすべきである，という発想から歴史を「鑑（かがみ）」と呼ぶようになった。司馬光の『資治通鑑』などがその例である。また，鏡に神秘的な意味をみようとしたのが道家系の人々であった。すなわち，鏡の外物があるがままに映す能力に，みずからを白紙の状態において，来るものは拒まず去るものは追わない，無為のありかたの象徴としたのである。この考えを敷衍して対象の本質を見つめつつ，対象と自己とが合一していく神秘主義的な体験 — 玄鏡 — という境地にまで深化した。さらに，魏晉南北朝では，鏡の呪術的な能力が強調され，神仙・道教思想とからみあいつつ展開していった。その中心となる考え方は妖怪変

化の正体をあらわすもので、人間の姿をとって出現したものたちの正体を、鏡によって見破るなどの話しが『抱朴子』や志怪小説などに見える。¹⁰⁾

日本では、三種の神器の一つであり、女の魂を象徴するものでもあった。例えば、妊婦が鏡を身に着けることで葬式や火事などの不幸から逃れられるなどの伝承があった。逆に、新生児や病人など霊魂が不安定なものは鏡により引き込まれるおそれがある、として忌んだ。また、日本中国ともに鏡が割れることを離婚の象徴(破鏡)としている。¹¹⁾

西洋において鏡は「反転した世界」、つまり鏡の中では右手は左手となってしまうことから、像と類似という二つの概念がもたらされた。プラトンは「可視の世界は不可視の世界のかたどり」であると『ティーマイオス』で言った。これらの思考から鏡や狂気をもたらす世界は反転した世界であり、不合理と混乱とがつきまとうとされてきた。¹²⁾

また、鏡の面が世界の「こちら側」と「あちら側」を分けるレンズのようなものと捉えられ、鏡の向こうにもう一つの世界がある、という概念は通文化的に存在し、世界各地で見られる。¹³⁾

中国明清時代、特に『紅樓夢』に出てくる風月宝鑑に関する論考もある。¹⁴⁾

1-3. 悲恋から狂死へ

透谷は妻ミナがありながら、普連土学園の教え子であった富井まつ子との間に「悲恋とでも名づけるしかない雰囲気が微妙に生じていた」が、「とくに透谷においては悲恋は一つの観念であって事実ではない」¹⁵⁾とされる。透谷自身も『松島において芭蕉翁を読む』で「内界は悲恋を醸す場なる事を知りながら、われは其悲恋に近より、其悲恋に刺されんことを楽しむ心あるを奈何せむ」と言っており、この感情を『我牢獄』で表現したが、さらに小説『宿魂鏡』において「癡に狂する」地底においてころみたのである」と指摘されている。¹⁶⁾

まつ子は元々卒業と同時に結婚を強いられており、その相談を透谷にしているうち、両者の感情が通ったようである。まつ子はもちろん親の取り決めた縁談には乗り気ではなかった。

「在学中の娘の婚約に対する、母親の強い力という点は『星夜』と関連し、まだ学校がすまぬからと言うのに「今年の中に祝言するのさせるの」といった叙述は、藤村が目の前にした「断らうか、断るまいか」という松子の苦悩する姿にも及んでくるようである。「病みほうけた人」のイメージに松子がかさねられていたとする想定も、それほど無理ではなかろう。…透谷はするどくも松子の死と自己の死を先取していたのであろうか。」¹⁷⁾

「(1892：明治25年6月1日に長女英子が誕生しているが)、1892：明治25年5月下旬、まもなく卒業するまつ子が身のふりかたでも相談したのだろうか。それとなく夫の身边にただよう背信の気配に美那子が気づかないはずはない。」¹⁸⁾

この「悲恋」の行く末を透谷は『宿魂鏡』により予言したのではないだろうか。つまり、作中弓子をまつ子になぞらえ、弓子と芳三との恋が成就できない原因として、弓子の継母の反対と芳三の婚約者阿梅とを設定した。むろん、継母はまつ子の実家を、婚約者阿梅は妻であるミナを暗喩している。この許されない恋の行方は死をもって終わり、ストーリーとしてはいわゆる「道行(駆け落ち・心中)」であり、とりたてての目新しさはない。しかし、鏡に弓子の生霊とも言える「魂」を付加することにより、女の一念が芳三の精神を破綻させ、幻覚幻聴をもたらし、最終的には遠隔地にいながら二人が死ぬという斬新な結果を生んだ。この作品における鏡は、悲恋をぶち壊す不条理な存在であり、悲恋の当事者を狂わせ死に至らしめるものである。こうして見ると、鏡というアイテムは非常に重要であり、これがなければ単なる三角関係

を描く陳腐な作品となったと思われる。

この死に方を平岡敏夫は「死に到らねばやまぬ狂愛として深く掘り下げた」と言っている。¹⁹⁾ 透谷において「悲恋」の結末は「狂死」であるものと想定されたのだろうか。

また、清水均は「透谷の恋愛観が従来ミナとキリスト教との関わりで捉えられ、その結果一定のイメージで語られがちであったのに対し、そこには大きな変貌があった。」²⁰⁾ と言っているが、「大きな変貌」がこの作品によって表出されているのではないだろうか。

一方、『紅樓夢』の中にも似たようなプロットがある。第82回・第83回に見える「別床同夢」である。

「(宝玉：主人公の若君) そんな、わたしのことが信じられぬとおっしゃるなら、さあ、この胸のうちをごらん下さい」こういったかと思うと宝玉、やにわに小刀を手にとって、胸もとをさっと切り開けば、真っ赤な血潮がどくどくと噴き出だす。黛玉(宝玉の従妹)はびっくり仰天、あまりのことに魂もなにも飛んで散ったかのよう。…「あなた、どうしてこんなまねを！それなら、まずわたくしを先に殺して！」「なに、心配は要りません。わたしの心をお見せるだけですから」と、宝玉はいつて、なおも手を切り開いたあたりにやり、めったやたらとまさぐっています。(第82回)

「(襲人：宝玉の女中) ところが夜中になってから、(宝玉が) 大声あげて心臓が痛い痛いと言わだされ、なにやら口から出まかせにおっしゃって、刀で胸を裁ち割られるようだ、などと言いはられるでしょ。…」(第83回)²¹⁾

宝玉と黛玉は幼い頃より昵懇で成長してからも相思相愛であったが、黛玉のライバルとでもいべき宝釵という従姉の存在があった。宝玉が生まれる際に口に含んでいたという宝玉と、宝釵がお坊様から勧められ下げている金の首飾りに彫ってある文言が対句のようであり(なく

すなわするな いのちはときわに／すつるなはなすな よわいはかきわに)、将来「玉」の持ち主と結ばれると予言されていた。このため、黛玉は事あるごとに気を回して宝玉の怒りを買ひ、宝玉も実行不可能な誓いを立てたりして騒動を起こした。このプロットも夢の中とは言え二人の舌戦が繰り広げられているのであるが、「心」を見せるからと言って胸を切り開く宝玉に驚く黛玉と、同時刻に心臓が痛い大騒ぎする宝玉との「別床同夢」は、『宿魂鏡』において同時刻に死亡する主人公たちと似通っている。むしろ、藤村が抄訳したのは第12回のみであり、全訳(第80回までと、後半40回は原文のみ)は大正9～11年の『国訳漢文大成』の一つとして幸田露伴・平岡龍城によって上梓されるまで存在しなかったもので、透谷は紅樓夢のプロットをおそらく知らなかったと思われるが、同時刻に両者に同じ現象が生じるという点は共通している。

1-4. 『宿魂鏡』の評価と実像

発表当時、『宿魂鏡』はマイナス評価が多かった。²²⁾ 特に島崎藤村・田山花袋・正宗白鳥の三者の論評は有名である。

「あの作は透谷君の得意作では勿論なかったと思うが、わたしにはその病的方面が窺われると思う。」(島崎藤村 1920：大正9年)

「硯友社あたりでは、殆どそれを問題にしてゐなかった。『ああいふ風に西洋かぶれになるから駄目だ。ちっとも人間が書けてはゐない。それに何うだ？あの文章の拙さは。丸で論文か何か書く気で小説を書いてゐる。』かういふ風に誰も彼も言った。技巧の拙さという意味では、現に私もそう思っていた。しかし拙いと言っても、何らかの努力と、何らかの暗示と、何らかの新しさをそこに認めないわけにはいかなかった。」(田山花袋 1923：大正12年)

「一般向きでなく技巧も冴えてゐなかった。

…当時の文壇には珍しく独創的分子がそこに含まれてゐたと思はれる。」(正宗白鳥 1938: 昭和13年)

これ以外にも、マイナス評価する評論家がいる。

「敬愛する徳富蘇峰からの依頼で、一気に世に出でんとした透谷の試みとしては、無残な結果に終わっているところがある。」²³⁾ (榎林滉二 1998: 平成10年)

「透谷としてはたいへんな力作だが、上下から成るうち、上は江戸文学の亜流だとして評判がよくない。」(平岡敏夫 2009: 平成21年)

一方、『宿魂鏡』を評価する人々もいる。

「美より醜と化した現実、醜より美を生じた幻想、その両者を真如世界に団円させて文芸的妙品を作ったもの。…明治文学史上稀に見る傑作の一つ。」²⁴⁾ (柳田泉 1942: 昭和17年)

「透谷の、小説と評論における文体の問題…彼の文体は小説に対しては明らかに効力をもたなかった。…しかし、そうかと言って、例えば、次のような『宿魂鏡』の文脈が平易な言文一致体でもって著わされていたら、ことはもっと珍奇なものになっていたであろう。」²⁵⁾ (挙例された文章は注21へ) (榎林滉二1984: 昭和59年)

「一見荒唐無稽と思われる『宿魂鏡』も鷗外の日常的理性が取り落とした、幽冥界に及ぶ〈愛のリビドー〉を歌いあげる作品としてみる時、…『宿魂鏡』はまた別な意味でのリアリティを帯びたものになってくる。…藤村の言う、透谷の弱点を示す失敗作とばかりは言えないものとなって来るであろう。」²⁶⁾ (橋詰静子 1986: 昭和61年)

「上篇の描写の不充分さが下篇の芳三狂気を

恋の未練執着の故か、幻鏡の弄びか不明にしてしまうのである。」「透谷がいかに写実小説に不得手で、そのストーリーの展開をもてあましているかを物語っている。…それなら、『宿魂鏡』は全くの失敗作かと問われれば、否定せざるをえない。」²⁷⁾ (森山重雄 1986: 昭和61年)

「『宿魂鏡』の下篇が暗示するものは《鷗外を頂点として形成されつつある近代日本文学の秩序に初めて》向けられた本質的な批判の位相である。—ただ、彼は小説の言語を詩的な表出に近づけることによって、それをはるかなる夢のように望み視たに過ぎない、と言えるだろう。」²⁸⁾ (吉増剛造 1987: 昭和62年)

「当代の才子佳人小説あるいは人情世態小説となり、その主脳たる「人情」(恋愛)は〈幻鏡〉という装置により、同時代小説のなかで独自の特色を示すにいたったのである。」²⁹⁾ (平岡敏夫 1995年: 平成7年)

「透谷の技量不足に目を奪われて、客観描写がこの作品に必要であったということを見落としてはならず、むしろ、客観描写においてこの作品の位置付けが可能となるのである。…同時代の既成小説との異質性を開示しているのである。…新しい小説を形成しようとする透谷の野心的試みが刻印されている。」³⁰⁾ (清水均 1998: 平成10年)

結局のところ『宿魂鏡』の評価はいまだ定説をみないが、この小説の欠点について坂田等は以下の指摘をしている。

「テーマを急遽変えたことによる準備不足があったといえるかもしれません。アイデアによりかかってしまったところもあるのではないのでしょうか。…下篇で交わされる芳三と弓子の濃い恋情は、土台としての上篇から導き出されなければならないが、その濃度の構築が上篇で行われていないところにこの小説の不自然さと弱

さがあるように思われる。…

また、上篇の終わりに突然、〈古鏡〉が、しかも若い女性から出てくるところなども、アイデアによりかかった不自然さが表われているのではないのでしょうか。」(坂田等 2011:平成23年)³¹⁾

実際、『国民之友』第176号(1892:明治25年12月23日)に翌年1月13日発行の春期附録予告文には『狭穂姫』と出ていたのを、諸事情により急遽内容を変更した。その事によって「悲恋→狂死」というテーマと「古鏡」というアイテムを得て『宿魂鏡』を執筆した。その発想は斬新ながらも、小説の出来としてはいま一つ世間アピールできなかったのではないだろうか。

2. 「三日幻境」と『紅樓夢』

2-1. 「三日幻境」ネーミング初探

透谷は自由民建運動に傾倒していた頃、運動の盛んだった三多摩を希望(ホープ)の故郷と呼び、1884:明治17年の夏、八王子川口村の秋山國三郎を訪ね意気投合し、彼の住む森下集落を幻境と呼んだ。そして、その年の暮から翌年にかけて川口村に滞在している。7年ぶりに再訪した際の随筆を「三日幻境」として白表『女學雑誌』325号・327号(1892:明治25年8月13日、9月10日)に発表、高い評価を得た。³²⁾

さて、なぜ「三日」なのかを森山重雄は次のように考察している。



上川町東部会館 1977:昭和52年6月19日

「透谷がわざわざ〈三日〉と限定したように、それは日常に還元できない体験だったことを示している。いわば〈ハレ〉と〈ケ〉の区別で言えば〈ハレ〉の三日であったのだ。…〈三日幻境〉は三日間の祝祭でもあった。」³³⁾

では、「幻境」という言葉を使った理由は何なのだろうか。元々透谷は「幻」字を好んでいた。橋詰静子は「(幻は)ある超自然のシンボルであり、これに囚われるとき人は幻の世界に入りその目を奪われ、ついには死に至るようなもの」³⁴⁾と言っている。しかし、「幻境」という用語は日本語にはあまり見られない。透谷の造語である可能性も否定できないが、やはり『紅樓夢』の「幻境」を借りたのではないだろうか。というのも、藤村が『紅樓夢』第12回の抄訳を発表した直前(伊藤漱平によると2ヶ月前だそうだ)に、森槐南が第1回の抄訳を『城南評論』2号に発表し、別に「紅樓夢評論」を『早稲田文学』27号に寄稿している。³⁵⁾ 本稿「1-1.『紅樓夢』第12回」にもあるように、藤村は栗本鋤雲と田邊蓮舟に師事していた。田邊蓮舟・栗本鋤雲・鷲津毅堂(永井荷風の祖父)は森槐南らと親しく交流していた³⁶⁾ので、『紅樓夢』好きの森槐南から蓮舟→藤村といった経路で、透谷が『紅樓夢』第1回に登場する「太虚幻境」を知っていた可能性が高いと考えられる。

2-2. 『紅樓夢』における幻境

『紅樓夢』は文字獄を回避するために様々な仕掛けがされているが、物語を二重構造—天上界である太虚幻境と地上界である賈府(主として大観園)—に設定したのもその一つである。太虚幻境は第1回に見え、物語の所々に夢の中とか回想などに出てくる場所である。「太虚」とは天のことであり、「幻境」は仙境ほどの意味である。³⁷⁾ 太虚幻境をキーワードとすると『紅樓夢』は一種の貴種流離譚とも言え、太虚幻境にある「金陵十二釵」なる書付に、地上界(大観園)に住む女性たちの運命が示されており、

読者はそれによって登場人物の運命を知り得るのである。³⁸⁾

「三日幻境」は「三日間滞在した仙境にも似た場所」という意味であろう。そこに「幻」字を使用した点に、もしかしたら『紅樓夢』の影響があるかもしれない。「幻」字の本義は「惑わす」であり、『説文解字』には「予（あたえる）」を反転した字形で載っている。³⁹⁾

なお、透谷は作品の始めにこう言っている。

「回顧すれば七歳のむかし、我が早稲田にありし頃、我を迷はせし一幻境ありけり。」⁴⁰⁾

この「我を迷はせし」という箇所が「幻境」の「幻」に関係していると考えられる。あたかも『紅樓夢』において、太虚幻境が主人公賈宝玉を迷わせた上で覚醒させた場所であることと符合しているかのようである。

また、「三日」の意味について坂田等は次のように言っている。

「明治25年7月27日の夜に川口村森下の秋山國三郎宅を訪ねたが、ご本人は不在でその晩は帰って来なかった。もちろん家人も知らぬ仲ではないのでそこに泊めてもらった。

翌朝、家人は八王子に出かけているご当人のところに人をやって、透谷の来訪を知らせた。しかし、お昼頃まで戻らないので、昔遊んだ近くの山里を散策した。日が暮れて戻ってみると、國三郎も帰ってきていて、その晩（28日）は再会の喜びで寝もせず語り尽くした。

翌日は起きるのも遅かったが、期待していた大矢正夫は来ず、國三郎と二人して高尾山に向った。その晩（29日）は八王子に一泊する。翌日は高尾山に登り、その晩（30日）はその山麓に一泊する。翌日（31日）は二人して大矢正夫のもとを訪れ、同道して百草園に遊ぶ、というのが「三日幻境」の行程です。これだけからすると4泊したことになる。しかし、次の「幻境」の意味にも関わることだが、川口村森下での秋山國三郎との関係であることが透谷にとって意味のあることなのである。だから、実質28日の夜から31日の朝までと考えてもよいのではないだろうか。」⁴¹⁾

以上、「三日幻境」ネーミングについて考察を行なった。

3. 透谷における「夢」

『紅樓夢』は書名に「夢」があるように、ところどころに「夢」が重要なモチーフとなっている。とりわけ第1回の太虚幻境で、主人公賈宝玉が聞いた「紅樓夢十二曲」が書名の根拠となっている。この場合の「夢」は〈黄粱一炊夢〉の夢で、「はかない」という意味である。つまり、紅樓夢は「豪華な住まいで楽しく過ごしても、所詮ははかないもの」と解釈できる。

一方、透谷における「夢」は以下に集約されていると考えられる。

「透谷の抒情詩を読んでいくと、明治21年頃から始まった詩作活動に〈夢〉なる語が多用されていることに気付く。しかも、この〈夢〉という語は透谷の詩意識を集中的に表現しているように思えるのである。…大岡信は芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の句を引用して、「そういう慣用句的な『夢』（ある共通な情緒を醸し出す語としての夢）と鋭く対立する孤独な自己意識を感じさせるが、…ロマン主義的な聖化された『夢』とは、やはり違った性質のものである」と言っている。…明治維新により、個人の実存は新たな桎梏を味わい、内により深刻な危機意識を醸成させた。…必然的な反照として〈夢〉に新たな意味を呼び入れた。このことの最も早い時期の例証として、透谷の詩集を見ることができる。」⁴²⁾（平岡敏夫 1995：平成7年）

平岡の指摘通り、もともと透谷は「夢・鏡」という言葉を好んで使ってきた。

「むかしを拙なしと言ふも晩し、
今をおこぞと言ふもむやくし、
夢も鏡も天も地も、
いまのわが身をいかにせむ。」

「ゆきだふれ」第5連

「否定すべき現実世界の先にイメージされるものの表現として〈夢〉を使用していたのである。…おのれを立脚させ、かつ実存の根拠として自覚された「内部生命」の存在は「夢・鏡・天・地」をも無化し、それらがおのれの立場ではないとの認識にいたらしめたのだろう」⁴³⁾ (黒古一夫 1979: 昭和54年)

以上概観したように、透谷は「夢」という言葉を愛したがゆえに『紅樓夢』に関心を示した可能性もある。透谷が藤村と知り合ったのが1892: 明治25年春で、抄訳『紅樓夢』第12回発表が同年6月18日、『宿魂鏡』の掲載が翌年1月13日である。わずか1年にも満たないうちに小説のモチーフとして使っていることが分かる。

おわりに

本稿は透谷と『紅樓夢』との関係を、小説『宿魂鏡』と随筆「三日幻境」より考察した。結論としては、『宿魂鏡』(下)における古鏡は藤村による『紅樓夢』第12回抄訳をヒントにして創作された。だが、上篇との関係がスムーズにいかなかったこと、文体に難があったことなどから当時の文壇では高い評価が得られなかった。「三日幻境」の「幻境」が『紅樓夢』第1回などに出てくる「太虚幻境」よりの借用である可能性を指摘した。

また、『宿魂鏡』発表の14年後に漱石が良く似たプロットを使った。

「夏目漱石『琴のそら音』(1905: 明治38年5月)の一エピソードに、新婚の妻が日露戦争従軍の夫に託した小さい鏡の話がある。ある朝、陣中で夫が鏡を見ると「青白い細君の病気に簀(やつ)れた姿がスーとあらはれた」のであり、同じ時刻に細君は自宅でインフルエンザのため死んでいた。「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、も

う一遍御目に懸ります」ということばを細君は実行したわけだ。」⁴⁴⁾

これが直接透谷からの影響なのか、あるいは『紅樓夢』を含む中国明清小説などからの着想だったのかは不明ながら、興味深い点である。なお、大野玉江は漱石の初期作品群—『虞美人草』『薤露行』『幻影の盾』など—に『宿魂鏡』が何らかの係わりを持ったのではないかと、という論を展開している。⁴⁵⁾ 詳細を別稿で発表したい。

注

- 1) 坂田等「北村透谷関係年表」より。なお、坂田等「透谷の小説『宿魂鏡』について」<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~gudou/> 2011: 平成23年 や私信を参考にした。
- 2) 平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』有精堂1995: 平成7年 p.369 によれば、笹淵氏が最初に指摘したとある。清水均『「宿魂鏡」論—「想」の表出位置—』『日本文学研究大成 北村透谷』所収 国書刊行会 1998: 平成10年 p.269 注13によるとその初出は『「文学界」とその時代』(上) 1959: 昭和34年 だという。また、『伊藤漱平著作集』第3巻 p.196や注にも笹淵友一の事が書かれている。
- 3) 伊藤漱平『紅樓夢』上 解説 平凡社1973: 昭和48年 p.569
- 4) 前掲書『紅樓夢』上 p.161
- 5) 島崎藤村『藤村全集』第16巻 筑摩書房 1967: 昭和42年 p.59
- 6) 前掲書『紅樓夢』上 解説 p.583
- 7) 伊藤漱平『伊藤漱平著作集』第3巻 汲古書院 2008: 平成20年 p.196
- 8) 『世界大百科事典』平凡社 1988: 昭和63年 5巻 p.77
- 9) 許慎書『説文解字』中華書局影印 1963 p.294 池間訳
- 10) 前掲書『世界大百科事典』p.78
- 11) 前掲書『世界大百科事典』p.79
- 12) サビース・メルシオール=ボネ『鏡の文化史』法政大学出版局 2003: 平成14年 p.114・118・213
- 13) 武田雅哉『鏡の中国文学誌』言語文化部研究報告叢書(北海道大学) 1999: 平成11年 p.204
- 14) 森中美樹『「紅樓夢」「風月宝鑑」考: 明清小説・戯曲に描かれた鏡中世界との比較から』中国中世文学研究51 2007: 平成19年
- 15) 森山重雄『北村透谷 エロスの水脈』日本図書セ

- ンター 1986：昭和61年 pp.257～258
- 16) 前掲書『北村透谷 エロスの水脈』p.268
 - 17) 平岡敏夫『続北村透谷研究』有精堂 1971：昭和46年 p.132
 - 18) 江刺昭子『透谷の妻—石阪美那子の生涯—』日本エディタースクール出版部 1995：平成7年 p.138
 - 19) 平岡敏夫『『宿魂鏡』と同時代小説』『北村透谷没後百年のメルクマーク』おうふう2009：平成21年 所収 p.163
 - 20) 清水均「恋愛小説としての『我牢獄』『宿魂鏡』—透谷における小説の位相』『透谷と近代日本』北村透谷研究会編 翰林書房 1994：平成6年 所収 p.317
 - 21) 前掲書『紅樓夢』下 p.27・35
 - 22) 呉佩珍「明治中期における「恋愛」概念の探究—北村透谷の『宿魂鏡』を軸として—」『日本文化研究』筑波大学大学院博士課程紀要 2001：平成13年 pp.107～122
 - 23) 「『宿魂鏡』小考—「異界」なるもの—」横林滉二『透谷と現代 21世紀へのアプローチ』北村透谷研究会編 翰林書房 1998：平成10年 所収 p.230
 - 24) 柳田泉『幸田露伴』中央公論社 1942：昭和17年 p.367
 - 25) 横林滉二『北村透谷と徳富蘇峰』有精堂1984：昭和59年 p.106
「や、や、御身（そなた）は矢張鏡の上に。今物言ひしは御身か、但しは鏡か。いまはしや幻鏡、見事この我を狂人にしたか。恋も情も、汝幻鏡のいたづらか。己れ幻鏡、まごゝろ籠めし弓子の姿も、汝が妖魅の仕業か。まことか、いつはりか、咄、我を玩弄ぶは汝か。と言ひ放ち、彼古鏡を真向の壁に抛付すれば、鏘然たる音もろ共に、朦朧として異態の怪物現はれ出たり。骷髏にして骷髏にあらず、人間にして人間にあらず、凄惨醜毒の状、一々筆に尽くし難し、那邊の幽暗界より、何事の要むるものありて、そも此処には現はれけむ。」
 - 26) 橋詰静子『透谷詩考』国文社 1986：昭和61年 p.89
 - 27) 前掲書『北村透谷 エロスの水脈』p.274・269
 - 28) 吉増剛造『透谷ノート』小沢書店 1987：昭和62年 p.341
 - 29) 平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』有精堂 1995：平成7年 p.360
 - 30) 前掲書『『宿魂鏡』論—「想」の表出位置—』p.274
 - 31) 池間宛私信 2011年
 - 32) 「三日幻境」を平岡敏夫は『透谷研究第三』（1982：昭和57年）でエッセイだと言っている。p.372
 - 33) 前掲書『北村透谷 エロスの水脈』p.197
 - 34) 前掲書『透谷詩考』p.81
 - 35) 前掲書『紅樓夢』上 解説 p.583
 - 36) 池間里代子「荷風と『紅樓夢』」日本大学『国際関係研究』第32巻第1号 2011年
 - 37) 『紅樓夢鑑賞辞典』上海古籍出版社 1988年 p.407
 - 38) 坂巻里代子「『石头記』研究—关于太虚幻境」日本大学文学部卒業論文1986：昭和61年
 - 39) 前掲書『説文解字』p.84
 - 40) 青空文庫<http://www.aozora.gr.jp/>底本は『現代日本文学大系6 北村透谷・山路愛山集』筑摩書房 1969：昭和44年
 - 41) 池間宛私信 2011年
 - 42) 前掲書『北村透谷 評伝』p.127
 - 43) 前掲書『北村透谷論—天空への渴望』冬樹社 p.128・143
 - 44) 前掲書『北村透谷研究 評伝』p.370
 - 45) 大野玉江「『宿魂鏡』と漱石」解釈学会『解釈』1979：昭和54年 p.5